

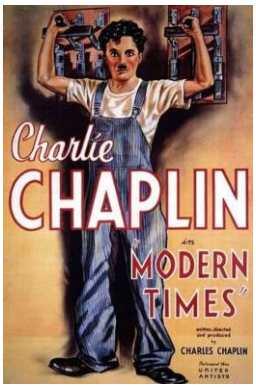
便利と幸福

永田円了

What Do We Lose When We Avoid Pain

私たちは今“便利な時代”を生きている。ワンクリックで買い物ができ、スマホひとつで世界と繋がれる。生きたい場所も、ほしい情報も、手をのばせばすぐに届く。それは 10 数年前には想像もできなかったこと。技術は人の生活を軽く、速く、そして豊かにする。しかし、その便利さの中で、ふと、心が置いてきぼりになっている感覚を覚えないだろうか。

「こんなに便利なのに、なぜ幸せになった気がしないのだろう」便利さと幸せは、本来同じ方向を向いていたはずである。しかし、どこかでその道が分かれてしまった。今回はその“分岐点”を探り、便利さの影で、何を失おうとしているのかを検証してみたい。



例えば料理を思い出してみる。野菜を刻む。鍋から立ち上る香りを感じる。誰かのために、少し濃いか、薄いか、味を考える。料理にかかる時間だけをみれば、それは「手間」である。けれど、その手間の中に心がある。手間とは、面倒ではなく、“関わり”のこと。誰かのために時間を使う。自分の手で何かを形にする。そこには、便利さでは置き換えられない歓びがある。

便利になるほど、私たちは「過程」を飛び越えるようになった。答えを早く手に入れ、迷う時間をなくす。しかし、人生というものは、果たして効率と最短距離で進めばいいのだろうか。遠回りしたから出会えた人がいる。道に迷ったから見つけた景色がある。予定通りにいかなかったから、生まれた会話がある。人間の幸せというものは、案外、そういう「無駄」の中に宿っていると考えられないだろうか。

便利さは、決して悪くない。むしろ、私たち人生を支えている。だからこそ、便利さの「その先」を考えたい。便利さは、人間の時間を奪わないためにあるのではない。人間が、その時間を大切に生きるためにあるのではないか。そのことを忘れたとき、「便利さと幸せ」の道は、静かに分かれていく。そして、もしかすると幸せとは、便利さの先に置かれているものではなく、便利さによって生まれた「余白」の中で、誰かと話す、誰かを思う、自分自身と向き合う。その余白に人間の温度が戻ってきたとき、便利さは初めて幸せと出会う。

結局、人間にとって大事なのは、「どれだけ便利に生きられるか」ではなく、「便利になったことで、何を大切にできるようになったか」ではないだろうか。速さではなく、温かさを。効率ではなく、余白を。答えではなく、問いを。そして何よりも、人の感覚や、関わりを大事にすること。それは、日々の私たちの小さな選択の中にある。少し遠回りをする。誰かの話を、急がずに聴く。自分の手で何かをつくる。答えを急がず、しばらく考える。そんな小さな「不便」の中に、人間が人間であるための時間が残されていると思う。もしかすると、幸せとは、便利さの完成形ではなく、便利さの中に、あえて残された「余白」なのかもしれない。

＜事 例＞
オルダス・ハクスレイ『すばらしい新世界』100 分で名著
麻薬、世界を狂わせた欲望　映像の世紀より
チャップリン　『モダンタイムス』1936 年制作アメリカ映画
映画『PLAN75』2022 年カンヌ国際映画祭 特別表彰
映画『楢山節考』姥捨て山、1983 年カンヌ国際映画祭パルムドール
『響き合う父と子』大江健三郎と光ちゃん
河合隼雄　自己実現はバラ色にあらず
『荷を担ぎ 人生に意味』～ある寺僧の決断～ 朝日新聞 2019/10/16
歌・財津和夫『青春の影』



円了のホームページ：www.enryo.jp